

知ることはそれだけで疑いをきれいに雪ぐ——國分功一郎『スピノザの方法』について

千葉雅也

1 懐疑論批判と精神分析

つまり、デカルトは自分が何かを知っているという事実をどうすれば確証し、伝達し、共有できるか、それを徹底的に考えた。しかも疑うためだけに疑う懐疑主義者たち、あるいは彼らのように何から何まで疑ってしまう自分をも説得できる仕方で、その課題が全うされることを求めた。茶々を入れることだけを目的としている者であっても、この真理だけは否定できない、そんな真理が必要であったのはそのためである。あの絶対的懐疑の泥沼と、そこからの生還劇はこうして生まれた。デカルトが到達したコギトの真理とは、それ自体で懐疑を蹴散らすことのできる一撃必殺の真理である。デカルトにとって真理は論駁する力、説得する力をもつ強い真理でなければならない。これはデカルトが徹頭徹尾他者に向かっていったことを意味する。デカルトの考える真理には、他者がつねに陰を落としている。(47頁)

それに対し、スピノザは、自分がデカルトのように問い詰められるかもしれないことなど気にもとめず、「いや、何事かを知っている者は、自分が何事かを知っていることを知っている」と述べているわけである。自分は何事かを知っていると思っっているけれども、本当に何かを知っているのだろうか……スピノザはそう疑うことがない。知ることはそれだけで疑いをきれいに雪ぐ。そこには、少なくともデカルトに取り憑いているような他者は完全に欠如している。「何かを知っている者は、自分が何かを知っていることを知っている」というこの何の変哲もないテーゼには、じつはスピノザの哲学的態度の根源が現れているのだ。(同頁)

☆ 「疑うために疑う」であるとか、「茶々を入れる」といった、懐疑「主義」は、精神がそれなりに健康であるからこそ可能な悪ふざけである。しかし、どうしようもない懐疑のエスカレーションによって実践上の困難をきたす人がいる。

☆ フロイト／ラカンの精神分析は、私たち人間がそもそも「他者の欲望」によって左右される存在であることを、大前提としている。欲望とは、「他者の欲望を欲望する」ことである。

☆ そもそも、この大前提を、認めるべきかどうか？

☆ 仮に、私たちは、つねに・すでに、「他者の欲望を欲望する」のだとしよう。

(1) 自分の欲望の根拠は、他者の欲望である。そして、その他者1は、また別の他者2の欲望を欲望しており、その他者2も、また別の他者3の欲望を欲望しており……と、この連鎖が、以下無限につづく。ゆえに、私たちの「自分の」欲望は、果てのない他所へと「疎外」されると言うしかない。通常、私たちは、その無限の系列がどうなっているか、徹底して追究しようとはしない。「このくらいのを欲望しておけばいいか」とラフに納得している。が、そう納得するときには、適当なレベルの遡行において、他者の(他者の他者の……)欲望を、自らに反射している。これが、神経症的なパーソナリティである。

(2) 他者の欲望をずっと遡及していくと、限りなく「無」へと近づいていく。適当なレベルの遡行で安んじることができず、無の欲望へ直行してしまう人がいる。すなわち自殺である。

(3) デカルトのコギトは、無限遡行する懐疑の系列をまるごと包含する「無限集合」としてのメタ視点であり、それを設定することで、自殺へと押し流されることを回避できる。

☆ 他方で、統合失調症のケースをどう考えるか？

☆ スピノザ主義は、懷疑の無限遡行に捲きこまれないようにと勧める健康法である。

☆ そこで、コギトではなく、まったく反対に、究極の他者である神から始める。

2 ラカンの 50-60 年代

☆ 50 年代末のラカンは、とりわけ『アンティゴネー』の解釈を通し、欲望のプロセスが「悲劇的」結末へ向かう危険性を考えていた。欲望の原因の無限遡行——ラカンはそれを終わらない「シニフィアン連鎖」として考える——のどんづまりは、無である。まさしく無へと赴く欲望こそが「純粹欲望」なのだが、その実現は、つまり自殺であり、さらに悲劇的には、ナチズムが最終的にそこへ突進したような、他者をも捲きこむサディズム的な自殺になってしまう。けれども、私たちの日常生活では、自殺のはるか手前で、怠惰にと言うべきか、欲望の昂進をそのつど宥める仮のマネージメントをしている。そのようなことが、どうして可能なのか。60 年代のラカンはむしろ、生きていくために必要な欲望の不純さに、論の重心を移していく。そこで前景化されたのが「対象 a」という概念である。対象 a は、無の穴をふさぐアドホックな対象であり、それをラカンは「ルアー」に喩える。対象 a は、私たちを、そのつどのイメージによって「騙して」停留させ、それ以上の遡行をさせないストッパーとして機能する。

☆ 対象 a は、シニフィアン連鎖 (= 象徴界) の無限性 (= 象徴界の穴としての現実界) を、アドホックに有限化する想像的なストッパーである。

☆ スピノザの並行論において、観念から観念への連鎖は、ラカンにおけるシニフィアン連鎖として、つまり象徴界として捉えられそうである。ならば、想像界と現実界は？

☆ 懷疑を止められない愚かさ、と、懷疑せずに物事を決めてしまう愚かさ。

☆ 後者は、与えられたイメージによる騙されで満足しているが、そういう面がないと私たちは生きていけないのではないか？ (→ こんな愚かさの肯定は、スピノザにあるのか？)

☆ ヒュームにおける「穏健な懷疑論 modest scepticism」の問題。もともとヒュームは、うつ病を通過した果てに、日常生活と懷疑とを両立させる「穏健な懷疑論」に至っている。

3 いくつかの疑問

☆ 懷疑なしに知ること、というスピノザの方法においては、神の観念をすばやくつかむことが第一であった。仮に、スピノザ流の教育論の一般化するとして、その場合も、神の観念から出発することになるのか？ もし、たんに「不必要に懷疑に惑わされないようにしよう」ということだけであれば、自己啓発的なアドバイス以上のことではないように思われる。やはり、スピノザの場合、懷疑の全廃 + 神からの開始が、密接に結びついているだろう。

☆ ある種の「自然回帰」的なスローガンと結びつきやすいのではと思われる。重畳する自己意識を捨てて、いわば「動物」のようにしなやかな直観的認識へ、といったスローガン (しかし、様々なストレス状況において、動物たちにも神経症があるのではないか)。

☆ 『スピノザの方法』では扱われなかった「身体がなしうること」の問題は？

☆ 『アンチ・オイディプス』における精神分析批判との関係。